

厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策政策研究事業）
総括研究報告書

職域での健診機会を利用した検査機会拡大のための新たな HIV 検査手法開発研究
（H29-エイズ-一般-007）

研究代表者 川畑拓也 地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所 主幹研究員

研究要旨

HIV 感染症は早期発見・治療により感染拡大と発症を防止することが必要であるが、我が国では症状が出て初めて感染が判明する HIV 症例は総報告数の約 30% を占める。そのうち就労世代は約 76% を占め、保健所等無料匿名検査を利用しにくい就労世代において発症する前に HIV 感染を検知する機会が失われている恐れがある。

本研究では、労働安全衛生法第 66 条に基づき事業者が労働者に対して実施する定期健康診断（規則第 44 条）において事業者の結果を知られることなく受けられる HIV 検査環境を健診施設に整備する方法の検討、健診受診者に最新の HIV 治療の情報や支援制度・支援組織を紹介することによる HIV/エイズの啓発、定期健康診断の機会に実施する HIV 検査を通じて潜在的な感染者を発見するための費用対効果の評価を行う。今年度は流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイピング、健診センター・人間ドック施設における HIV・梅毒検査の試行、健診施設で使用する HIV・梅毒検査案内の作成、健診機会を利用した HIV 知識習得の有効性の推定を実施した。

森 治代	大阪健康安全基盤研究所 総括研究員
駒野 淳	国立病院機構名古屋医療 センター 臨床検査科長
本村和嗣	大阪健康安全基盤研究所 感染症部ウイルス課 課長
小島洋子	大阪健康安全基盤研究所 主任研究員
渡邊 大	国立病院機構大阪医療セン ター HIV 感染制御研究室長
大森亮介	北海道大学人獣共通感染症 リサーチセンター 特任准 教授

A. 研究目的

HIV 感染症は早期発見・治療により感染の拡大と発症を防止することが必要であるが、我が国では症状が出て初めて感染が判明する HIV 症例が 2016 年の総報告数の約 30%（1448 例中 437 例）を占め、そのうち就労世代の 30～59 歳は約 76% を占める。大阪府内における我々の調査でも同様の結果が得られている（川畑、南界堂通信 2013 年春号、MASH 大阪編）。HIV 検査は保健所での無料匿名検査を軸とするが、時間・空間的制約から、就労世代にとっては利用しにくい。その結果、発症する前に HIV 感染を検知する機会が失わ

れている恐れがある。

本研究では、労働安全衛生法第 66 条に基づき事業者が労働者に対して実施する定期健康診断（規則第 44 条）において匿名 HIV 検査を事業者の結果を知られることなく受けられる環境を健診センターあるいは人間ドック施設（以下、健診施設）に整備する方法の確立、健診受診者に最新の HIV 治療の情報や陽性者向け支援制度・支援組織を紹介することによる HIV/エイズの啓発、定期健康診断の機会に実施する HIV 検査を通じて潜在的な感染者を発見するための費用対効果の評価を行う。

今年度は以下の研究を行った。

- (1) 流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイピング
- (2) 健診センター・人間ドック施設における HIV・梅毒検査の試行
- (3) 健診センター・人間ドック施設で使用する HIV・梅毒検査案内の作成
- (4) 健診機会を利用した HIV 知識習得の有効性の推定

B. 研究方法

(1) 流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイピングに関する研究

本研究では、梅毒トレポネーマの流行が一般住民の男女に拡大している事を

明らかとするため、ゲイ・バイセクシャル男性の梅毒疑い患者、異性愛の男女の梅毒疑い患者から得た潰瘍滲出液のスワブ検体あるいは尿検体合計 95 検体から DNA を抽出し、梅毒トレポネーマ遺伝子のタイピングを実施した。

(2) 健診センター・人間ドック施設における HIV・梅毒検査の試行

健診施設において、実際に HIV 検査・梅毒検査の試行を行うため、協力健診施設を募り、実施に向けた協議を重ねた。

(3) 健診センター・人間ドック施設で使用する HIV・梅毒検査案内の作成

健診施設における HIV・梅毒検査提供時に広報資材兼啓発資材として健診利用者全員に配布する検査の案内を作成した。

(4) 健診機会を利用した HIV 知識習得の有効性の推定

広報資材による知識習得の効果を評価するには、知識提供前後の HIV 感染症に関する理解度を比較する必要があるため、今年度は、健診センターの受検者を対象に知識提供前の HIV 感染症に対する理解を測る書面調査を行った。

C. 研究結果

(1) 流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイピング

検体 95 例中、TpN47 遺伝子あるいは *poIA* 遺伝子の PCR 法が陽性であった検体は 36 例 (37.9%) であり、その内訳は異性愛男性が 18 例、異性愛女性が 11 例、MSM が 7 例であった。梅毒遺伝子の *arp*, *tprE*, *tprG*, *tprJ*, *tp0548* を指標に用いた Enhanced CDC -typing (ECDCT) 法と、*tp0136*, *tp0548*, 23S rRNA の塩基配列を指標にした Sequencing-based Molecular Typing (SBMT) 法を併用した結果、梅毒トレポネーマ (*Treponema pallidum* subsp. *pallidum*) (TPA) の SS14 系統が 31 例 (86.1%)、TPA の Nichols 系統が 1 例 (2.8%)、TEN が 2 例 (5.6%) であった。また、感染経路が異性間性的接触の検体では、14d/f-SSR8 の遺伝子型の TPA が 78.6% と多くを占めており、特に女性の検体の 90.9% がこの遺伝子型であった。一方、同性間性的接触の検体ではこの遺伝子型の TPA は 1 例も認められず、それ以外の多様な遺伝子型が検出された。

(2) 健診センター・人間ドック施設における

HIV・梅毒検査の試行

協力の得られた沖縄県那覇市の健診施設と協議を重ねた結果、以下のような枠組みで健診利用者に検査の提供をして頂けるようになった。

・研究班開発の検査案内兼啓発資材の使用。

・HIV スクリーニング検査と梅毒 TP 抗体検査の提供。

・結果返却は陽性者については対面で、陰性者は圧着八ガキによる本人宛親展の郵送で実施。

・陽性者は那覇市保健所に紹介し、那覇市保健所にてカウンセリングと HIV 確認検査・梅毒の定量検査を実施し、陽性の場合は医療機関 (拠点病院や専門医院) に紹介する。

(3) 健診センター・人間ドック施設で使用する HIV・梅毒検査案内の作成

読みやすさと堅く無い印象になるよう配色やイラストの使用にこだわった案と、内容は等しく、健診施設のイメージに合わせた案の 2 種類の案内を作成した。

(4) 健診機会を利用した HIV 知識習得の有効性の推定

沖縄で行なったアンケート調査には男性 48 名、女性 54 名、不明 1 名の計 103 名が参加し、内閣府の調査対象と同様の性比であったが、年齢構造には差が見られた。

HIV 感染症とエイズの関係の認識については、同じ事を意味すると思っていたという回答が一番多く、エイズの印象については、死に至る病であるという回答が一番多く、HIV 感染の原因については、無防備な性行為という回答が一番多かった。HIV・エイズの最新情報の認知度については、治療方法は進歩しているが、完治させる事はできず、薬を飲み続けなければならないという回答が一番多く、HIV に感染したと思った場合の行動については、診療所いや病院で相談するという回答が一番多く、保健所での匿名・無料の HIV 検査の認知度については、知っているという回答と知らないという回答が同数であった。保健所で HIV 検査を受けやすくするために重要な事については、匿名・無料で受けられることの周知という回答が一番多かった。

また、HIV とエイズの関係の認識につ

いて、18歳から29歳まで、50歳以上の年齢群が、エイズの印象については60歳から69歳までを除いた全年齢群が、HIV・エイズの最新情報の認知度は30歳以上の年齢群全てにおいて、HIVに感染したと思った場合の行動については18歳から49歳までと50歳から59歳まで、保健所での匿名・無料のHIV検査の認知度については18歳から59歳までに、内閣府の調査結果との大きな差が見られた。

D. 考察

(1) 流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイプ

本研究の目的は、異性愛者の男女で梅毒が感染拡大していることを証明することであったが、大阪においては世界的に感染が拡大しているSS14系統の梅毒トレポネーマが、異性愛者の男女の間で流行している事、さらに男性同性間性的接触と異性間の性的接触では流行している梅毒トレポネーマに差があることを日本で初めて明らかにした(J Clin Microbiol. 2019 Vol. 57(1), doi:10.1128/JCM.01148-18.)。

この成果を自治体に還元し、梅毒対策として健診施設におけるHIV・梅毒検査モデル事業を導入する様、働きかけていきたい。

(2) 健診センター・人間ドック施設におけるHIV・梅毒検査の試行

今回、具体的な協力健診施設が得られ、ゼロから実際に健診におけるHIV・梅毒検査を提供する事が出来る様にまでこぎ着けられたことで、他の健診施設へ協力を呼びかけた場合に、協力施設が得やすくなる効果も期待でき、本研究において非常に大きな成果となったと考える。

(3) 健診センター・人間ドック施設で使用するHIV・梅毒検査案内の作成

資材に盛り込む必要のある啓発の語句や表現については、ある程度予想できるが、啓発資材がどのようなデザインであれば、知識や受検者数の向上に寄与するかは、実際に試用してみて、比較しなければ、明らかにすることは難しいと考える。

(4) 健診機会を利用したHIV知識習得の有効性の推定

沖縄のアンケートにおけるHIVとエイ

ズの関係の認識について、正しく理解していたと回答した人数が少なかった。これは、本研究の調査対象がまだHIVの理解度を高める事ができる余地がある事を意味し、本研究の主題である、健診施設でのHIVの知識習得の効果が期待される。そして、低年齢群ほど、保健所などの相談窓口にご相談すると回答した人数が少なかった。これは内閣府の調査結果と合致する結果であった。若年層の一般市民の保健所の活用の促進の為に、自治体による情報提供等の活動が必要である事が示唆される。

E. 結論

(1) 流行する梅毒トレポネーマの遺伝子タイプ

大阪地域の異性間性的接触で流行している梅毒トレポネーマは、男性同性間の性的接触で流行している梅毒トレポネーマとは異なるタイプ(遺伝子型)であることを明らかにした。

(2) 健診センター・人間ドック施設におけるHIV・梅毒検査の試行

これまでHIV検査・梅毒検査を健診利用者に提供していなかった健診施設において、検査を提供する直前までこぎ着けた。今後、他の健診施設への波及効果が期待される。

(3) 健診センター・人間ドック施設で使用するHIV・梅毒検査案内の作成

手にした者のHIVと梅毒の知識習得を可能とする、健診施設におけるHIV・梅毒検査の案内資材を試作した。今後、実際に使用し、その効果を検証する。

(4) 健診機会を利用したHIV知識習得の有効性の推定

本研究の調査対象ではHIVの知識習得に余地があり、健診施設でのHIVの知識習得の効果が期待される。

F. 健康危険情報

報告内容: 本邦で初めて *Treponema pallidum* subsp. *endemicum* (TEN) に感染した風土病性梅毒 (bejel: ベジェル) の患者5名 (全員がMSM) を、遺伝学的に確認した。患者の中には渡航歴の無い者も含まれ、梅毒トレポネーマ (TPA) の流行に紛れてTENが国内で流行していることが懸念される。

情報源: Kawahata T, et al, Emerging

Infectious Diseases, 2019, in press.
(accepted on 20-May-2019.)
https://wwwnc.cdc.gov/eid/article/25/8/18-1690_article

情報に関する評価・コメント:

グレードB情報(情報提供・経過注視)
コメント(本邦において健康への影響があり、科学的根拠も明確だが、梅毒トレポネーマと同じ治療法が有効であり、検査診断も梅毒トレポネーマと同じ方法で可能である為、緊急性に乏しい。)

その他: 論文公開後、ゲイコミュニティを通じゲイ・バイセクシャル男性へ情報提供を行うことを検討中である。

G. 研究発表

1. 論文発表

1. Yoko Kojima, Keiichi Furubayashi, Takuya Kawahata, Haruyo Mori, Jun Komano. Circulation of distinct *Treponema pallidum* strains in individuals with heterosexual orientation and men who have sex with men. *J Clin Microbiol.* 2019. 57:e01148-18. 2019
2. Makiko Kondo, Koji Sudo, Takako Sano, Takuya Kawahata, Ichiro Itoda, Shinya Iwamuro, Yukihiro Yoshimura, Natsuo Tachikawa, Yoko Kojima, Haruyo Mori, Hiroshi Fujiwara, Naoki Hasegawa, Shingo Kato. Comparative evaluation of the Geenius HIV 1/2 Confirmatory Assay and the HIV-1 and HIV-2 Western blots in the Japanese population. *PLoS ONE.* 2018,13(10):e0198924.
3. Koji Yahara; Shu-ichi Nakayama; Ken Shimuta; Ken-ichi Lee; Masatomo Morita; Takuya Kawahata; Toshiro Kuroki; Yuko Watanabe; Hitomi Ohya; Mitsuru Yasuda; Takashi Deguchi; Xavier Didelot; Makoto Ohnishi. Genomic surveillance of *Neisseria gonorrhoeae* to investigate the distribution and evolution of antimicrobial resistance determinants and lineages. *Microbial Genomics* 2018;4, DOI 10.1099/mgen.0.000205
4. Kurata T, Uchino K, Hotta C, Ogura A, Miyoshi T, Ogawa T, Kanbayashi D, Tanaka T, Yumisashi T, Komano J. Analysis of clinical parameters affecting immunoglobulin M-based diagnosis in adults with confirmed cases of rubella. *Microbiol Immunol.* 2019 Jan;63(1):32-35. doi: 10.1111/1348-0421.12664. PubMed PMID:30549103.
5. Sakon N, Sadamatsu K, Shinkai T, Hamajima Y, Yoshitomi H, Matsushima Y, Taerasoma F, Nakamura A, Takada R, Komano J, Nagasawa K, Katayama K, Kimura H. Molecular epidemiology of large foodborne outbreaks due to human norovirus GII.P17GII.17-contaminated dried shredded seaweed (nori). *Emerg Infect Dis.* 2018 May;24(5):920-923. doi: 10.3201/eid2405.171733.
6. Kariya N, Sakon N, Komano J, Tomono K, Iso H. Current Prevention and Control of Health Care-associated Infections in Long-term Care Facilities for Elderly in Japan. *J Infect Chemother.* 2018 May;24(5):347-352. doi:10.1016/j.jiac.2017.12.004. Epub 2018 Jan 11. PubMed PMID: 29336918.
7. 下坂馨歩, 浅香 敏之, 今村 淳治, 横幕能行, 片山 雅夫, 川崎 朋範, 下坂 寿希, 亀井 克彦, 矢田 啓二, 駒野 淳. ベトナム人 HIV 陽性者から分離された *Talaromyces marneffei* によるマルネツフェイ型ペニシリウム症の 1 例. *Med Mycol J.* 2018. 60(1), 15-20, 2019
8. Saeng-Aroon S, Saipradit N, Loket R, Klamkhai N, Boonmuang R, Kaewprommal P, Prommajan K, Takeda N, Sungkanuparphb S, Shioda T, Sangkitporn S, Motomura K. (責) External quality assessment scheme for HIV-1 drug resistance genotyping in Thailand, *AIDS Research and Human Retroviruses*, 2018 Sep 14. doi: 10.1089/AID.2017.0299. [Epub ahead of print]
9. Tacharoenmuang R, Komoto S, Guntapong R, Ide T, Singchai P, Upachai S, Fukuda S, Yoshida Y, Murata T, Yoshikawa T, Ruchusatsawat K, Motomura K, Takeda N, Sangkitporn S, Taniguchi K. (他) Characterization of a G10P[14] rotavirus strain from a diarrheic child in Thailand: Evidence for

- bovine-to-human zoonotic transmission. *Infection, Genetics and Evolution*, 63:43-57 2018
10. Kanbayashi D, Kurata T, Nishino Y, Orii F, Takii Y, Kinoshita M, Ohara T, Motomura K, Yumisashi T. (他) Rubella virus genotype 1E in travelers returning to Japan from Indonesia, 2017, *Emerging Infectious Diseases*, 24:1763-1765. 2018
 11. Yamaguchi T, Kawahara R, Katsukawa C, Kanki M, Harada T, Yonogi S, Iwasaki S, Uehara H, Okajima S, Nishimura H, Motomura K, Miyazono M, Kumeda Y, Kawatsu K. (他) Foodborne outbreak of group G streptococcal pharyngitis in a school dormitory in Osaka, Japan, *Journal of Clinical Microbiology*, Apr 25;56(5). 2018
 12. Nakayama EE, Saito A, Sultana T, Jin Z, Nohata K, Shibata M, Hosoi M, Motomura K, Shioda T, Sangkitporn S, Loket R, Saeng-Aroon S. (他) Naturally occurring mutations in HIV-1 CRF01_AE capsid affect viral sensitivity to restriction factors, *AIDS Research and Human Retroviruses*, 34:382-392. 2018
 13. Boonchan M, Guntapong R, Sripirom N, Ruchusatsawat K, Singchai P, Rungnobbakhun P, Tacharoenmuang R, Mizushima H, Tatsumi M, Takeda N, Sangkitporn S, Mekmullica J, Motomura K. (責) The dynamics of norovirus genotypes and genetic analysis of a novel recombinant GII.P12-GII.3 among infants and children in Bangkok, Thailand between 2014 and 2016. *Infection, Genetics and Evolution*, 60:133-139 2018
 14. Koizumi Y, Imadome KI, Ota Y, Minamiguchi H, Kodama Y, Watanabe D, Mikamo H Uehira T, Okada S, Shirasaka T. Dual Threat of Epstein-Barr Virus: an Autopsy Case Report of HIV-Positive Plasmablastic Lymphoma Complicating EBV-Associated Hemophagocytic Lymphohistiocytosis. *J Clin Immunol*. 2018 May;38(4):478-483. doi: 10.1007/s10875-018-0500-4. Epub 2018 Apr 23.
 15. Watanabe D, Uehira T, Suzuki S, Matsumoto E, Ueji T, Hirota K, Minami R, Takahama S, Hayashi K, Sawamura M, Yamamoto M, Shirasaka T. Clinical characteristics of HIV-1-infected patients with high levels of plasma interferon- : a multicenter observational study. *BMC Infect Dis*. 2019 Jan 5;19(1):11. doi: 10.1186/s12879-018-3643-2.
 16. Tanaka S, Kishi T, Ishihara A, Watanabe D, Uehira T, Ishida H, Shirasaka T, Mita E. Outbreak of hepatitis A linked to European outbreaks among men who have sex with men in Osaka, Japan, from March to July 2018. *Hepatol Res*. 2019 Jan 17. doi: 10.1111/hepr.13314. [Epub ahead of print]
 17. Manyando Simbotwe, Daisuke Fujikura, Miyuki Ohnuma, Ryosuke Omori, Yoshikazu Furuta, Geoffrey Munkombwe Muuka, Bernard Mudenda Hang'ombe, Hideaki Higashi. Development and application of a Bacillus anthracis protective antigen domain-1 in-house ELISA for the detection of anti-protective antigen antibodies in cattle in Zambia. *PloS one*. 13(10) e0205986 2018 年
 18. Ryosuke Omori, Hiam Chemaitelly, Christian L. Althaus, Laith J. Abu-Raddad. Does infection with Chlamydia trachomatis induce long-lasting partial immunity? Insights from mathematical modelling. *Sexually Transmitted Infections*. [epub ahead of print] 2018 年
 19. Houssein Ayoub, Hiam Chemaitelly, Ryosuke Omori, Laith Abu-Raddad. Hepatitis C virus infection spontaneous clearance: Has it been underestimated? *International Journal of Infectious Diseases*. 75 60-66. 2018 年
 20. Takeshi Koyama, Ryosuke Omori, Keisuke Koyama, Yoshitaka Matsui, Masahito Sugimoto. Optimization of diagnostic methods and criteria of endometritis

- for various postpartum days to evaluate infertility in dairy cows. *Theriogenology*. 119(1) 225-232 2018 年
21. Jednipit Borthong, Ryo Nakao, Ryosuke Omori, Chihiro Sugimoto, Orasa Suthienkul and Kimihito Ito. Comparison of database search methods for the detection of *Legionella pneumophila* in water samples using metagenomic analysis. *Frontiers in Microbiology*. 9(1272) 2018 年
 22. Silva P. Kouyoumjian, Marieke Heijnen, Karima Chaabna, Ghina R. Mumtaz, Ryosuke Omori, Peter Vickerman, Laith J. Abu-Raddad. Global population-level association between HSV-2 prevalence and HIV prevalence: Systematic review and meta-analyses. *AIDS* 32 1343-1352 2018 年
 23. Lara Khadra, Manale Harfouche, Ryosuke Omori, Guido Schwarzer, Hiam Chemaitelly, Laith J. Abu-Raddad. The epidemiology of herpes simplex virus type 1 in Asia: systematic review, meta-analyses, and meta-regressions. *Clinical Infectious Diseases* [epub ahead of print] 2018 年
 24. Jun Moriwaki, Ryosuke Omori, Michito Shimozuru, Hifumi Tsuruga, Tsutomu Mano, Toshio Tsubota. Evaluation of body condition using body mass and chest girth in brown bears of Hokkaido, Japan (*Ursus arctos yessoensis*). *Japanese Journal of Veterinary Research* 66(2) 71-81 2018 年
 25. Ryosuke Omori, Nico Nagelkerke, Laith J. Abu-Raddad. HIV and Herpes Simplex Virus Type 2 Epidemiologic Synergy: Misguided Observational Evidence? *Sexually Transmitted Infections* 94 372-376 2018 年
 26. Satoshi Sekiguchi, Patrick Presi, Ryosuke Omori, Katharina Staerk, Manon Schuppers, Norikazu Isoda, Yasuhiro Yoshikawa, Takashi Umemura, Hiroyuki Nakayama, Yoshinori Fujii, Yoshihiro Sakoda. Evaluation of bovine viral diarrhoea virus control strategies in dairy herds in Hokkaido, Japan using stochastic modelling. *Transboundary and Emerging Diseases* 65(1) e135-e144 2018 年.
2. 学会発表
1. 川畑拓也、小島洋子、森 治代、本村和嗣、渡邊 大、大森亮介、駒野 淳、福武勝幸、健診センター・人間ドックにおける HIV 検査の現状に関するアンケート調査結果、第 32 回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2018
 2. 小島洋子、川畑拓也、森 治代、駒野 淳、HIV 陽性者における HBV および梅毒トレポネーマの感染実態、第 32 回近畿エイズ研究会学術集会、大阪、2018
 3. 川畑拓也、小島洋子、古林敬一、口腔・咽頭検体の梅毒トレポネーマ遺伝子 PCR において梅毒陽性と誤認しかけた事例、第 7 回日本性感染症学会関西支部総会、大阪、2018
 4. 川畑拓也、小島洋子、古林敬一、モバイルリアルタイム PCR 装置 (PCR1100) を用いた梅毒トレポネーマ PCR 法の構築、第 31 回日本性感染症学会学術大会、東京、2018
 5. 川畑拓也、小島洋子、森 治代、井戸田 一朗、近藤真規子、佐野貴子、貞升健志、長島真美、高田 昇、加藤真吾、須藤弘二、今村顕史、エビデンスに基づいた専門職向け HIV 検査 Q&A 集の作成、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 6. 小島洋子、川畑拓也、森 治代、本村和嗣、渡邊 大、大森亮介、駒野 淳、福武勝幸、職域での健診機会を利用した健診センター・人間ドック施設における HIV 検査の現状調査、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 7. 近藤真規子、佐野貴子、長島真美、貞升健志、川畑拓也、加藤真吾、今村顕史、全国地方衛生研究所における HIV 検査実施状況、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 8. 貞升健志、長島真美、北村有里恵、熊谷 遼太、根岸あかね、新開敬行、松岡佐織、川畑拓也、近藤真規子、今村顕史、全国の地方衛生研究所を対象とした HIV 検査精度管理の実施、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 9. 土屋菜歩、佐野貴子、近藤真規子、堅多敦子、石丸雄二、城所敏英、カエベタ亜矢、川畑拓也、貞升健志、須藤弘二、加藤真吾、大木幸子、今井光信、今村顕史、

- 保健所・検査所における HIV 検査・相談実施状況および陽性率に関するアンケート調査、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
10. 土屋菜歩、佐野貴子、近藤真規子、堅多敦子、石丸雄二、城所敏英、カエベタ亜矢、川畑拓也、貞升健志、須藤弘二、加藤真吾、大木幸子、今井光信、今村顕史、保健所・検査所における梅毒検査実施状況および陽性率に関するアンケート調査、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 11. 齊藤孝子、松浦基夫、川畑拓也、森 治代、小島洋子、HIV 急性感染における HIVAg/Ab の発光強度と HIV-1 RNA 定量の乖離について、第 32 回日本エイズ学会学術集会、大阪、2018
 12. 渡邊 大。TAF の安全性評価。第 92 回日本感染症学会総会・学術講演会、2018 年
 13. 渡邊 大。薬剤耐性 HIV の臨床経験と抗 HIV 薬の薬物動態。第 32 回日本エイズ学会学術集会、2018 年
 14. Hiroki Yagura, Dai Watanabe, Takao Nakauchi, Kosuke Tomishima, Yasuharu Nishida, Munehiro Yoshino, Kunio Yamazaki, Tomoko Uehira and Takuma Shirasaka. ASSOCIATION OF TENOFOVIR LEVEL AND DISCONTINUATION DUE TO IMPAIRED RENAL FUNCTION. HIV drug therapy Glasgow 2018.
 15. 伊熊素子、西田恭治、山本雄大、湯川理己、来住知美、廣田和之、上地隆史、渡邊大、上平朝子、白阪琢磨。血友病個別化治療時代におけるアルブトレベノナコグアルファによる 4 週間隔定期補充療法の可能性。第 40 回日本血栓止血学会学術集会、2018 年
 16. 中内崇夫、矢倉裕輝、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。HIV 感染者における高尿酸血症の関連因子に関する検討。第 67 回日本感染症学会東日本地方会学術集会、2018 年
 17. 廣田和之、上地隆史、北島平太、寺前晃介、来住知美、伊熊素子、渡邊 大、西田恭治、白阪琢磨、上平朝子。両側内因性眼内炎で失明に至った糖尿病患者の一例。第 67 回日本感染症学会東日本地方会学術集会、2018 年
 18. 来住知美、渡邊 大、北島平太、寺前晃介、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、上平朝子、三田英治、白阪琢磨。大阪のエイズ診療ブロック拠点病院における A 型急性肝炎の流行。第 88 回日本感染症学会西日本地方会学術集会、2018 年
 19. 廣田和之、山本雄大、渡邊 大、北島平太、寺前晃介、来住知美、上地隆史、伊熊素子、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。溶血性貧血を契機に多中心性キャスルマン病と診断された HIV 感染者の一例。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 20. 加藤賢嗣、吉原雄二郎、渡邊 大、福本真司、和田恵子、安尾利彦、白阪琢磨、村井俊哉。HIV 関連神経認知障害 (HAND) と脳構造。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 21. 上地隆史、渡邊 大、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。細胞性免疫能が低下した HIV-1 感染者における LDH と α -D グルカンのニューモシスチス肺炎の診断能評価。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 22. 来住知美、渡邊 大、北島平太、寺前晃介、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、下司有加、松岡恭子、東 政美、中濱智子、上平朝子、白阪琢磨。自発検査で判明した新規 HIV 感染者の受検動機。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 23. 横幕能行、今橋真弓、伊藤俊広、山本政弘、岡 慎一、豊嶋崇徳、茂呂 寛、渡邊珠代、渡邊 大、藤井輝久。エイズ診療の拠点病院の診療機能評価と課題の検討。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 24. 岡崎玲子、蜂谷敦子、佐藤かおり、豊嶋崇徳、佐々木悟、伊藤俊広、林田庸総、岡 慎一、瀧永博之、古賀道子、長島真美、貞升健志、近藤真規子、椎野禎一郎、須藤弘二、加藤真吾、谷口俊文、猪狩英俊、寒川 整、石ヶ坪良明、吉野友祐、太田康男、茂呂 寛、渡邊珠代、松田昌和、重見 麗、岩谷靖雅、横幕能行、渡邊 大、小島洋子、森 治代、藤井輝久、高田清式、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎、杉浦 互、吉村和久、菊地正。国内新規 HIV/AIDS 診断症例における薬剤耐

- 性 HIV-1 の動向。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
25. 渡邊 大、上平朝子、矢倉裕輝、富島公介、中内崇夫、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、白阪琢磨。TDF から TAF に変更後の腎機能検査値の推移に対する併用キードラッグの影響に関する検討。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 26. 上平朝子、渡邊 大、矢倉裕輝、富島公介、中内崇夫、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、西田恭治、白阪琢磨。当院の 2 剤レジメンの現状。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 27. 富島公介、中内崇夫、矢倉裕輝、北島平太、寺前晃介、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。ラルテグラビル/エトラビルン/ダルナビル/リトナビルレジメンの長期投与症例についての検討。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月 3 日、2018 年
 28. 寺前晃介、北島平太、来住知美、廣田和之、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。ST 合剤で薬疹、ペンタミジンでアナフィラキシー様症状を起こした難治性ニューモシスチス肺炎の一例。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年
 29. 山本雄大、伊熊素子、渡邊 大、湯川理己、来住知美、廣田和之、上地隆史、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。ニューモシスチス肺炎に肺ノカルジア症を合併した後天性免疫不全症候群の 1 例。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月 3 日、2018 年
 30. 北島平太、廣田和之、寺前晃介、来住知美、伊熊素子、上地隆史、渡邊 大、西田恭治、上平朝子、白阪琢磨。抗 HIV 療法後に肝臓及び脾臓の病変増悪を認めた肺結核の一例。第 32 回日本エイズ学会学術集会・総会、2018 年 12 月 3 日、2018 年

H. 知的財産権の出願・登録状況
特になし。